

# COSMOS集



「あすなる集」特選

さようなら名古屋

池松 卯月\*北海道

四十年も過ぎた県にお別れの日までもうあとほんの数日  
こんなにも見慣れた街もこれからは心の中の故郷になる  
名古屋めし食べ納めむときしめんを啜りて我は無口になりぬ  
ういろうも赤福餅もさようなら時々食べるだけだったけど  
蒸し暑さ本格的になる前に名古屋の街に別れを告げる

初夏 中村 恵\*鳥取

玄関の手すりのうえの燕の巢ふたつ今年もつかわれている  
外でならすこし泣いてもかまわないかまわないから泣かないでいる  
肝臓の検査のまえの十日間だけ(金麦を断つち、ちの技  
半身に麻痺があればもおとうさんの滑舌はよい(酔ってないとき)  
晴天をうつして海は碧いろ潮風を夫とあるく初夏

フェイスシールド 伊藤 祐楓\*茨城

変化なき日々はきれいに剥がれゆくキャベツ、タマネギ、バウムクーヘン

〈菌磨き粉〉おさなき頃はうたがいのせす呼びており粉でもなきに  
死亡診断書とは死にたる証またあの日々を生きたる証  
すぐ先が〈前線〉なりと透明なフェイスシールド吾に告げたる日  
初めてのフェイスシールド越しにみる鏡の顔に〈覚悟〉の字見ゆ

祈りが通ず 新屋 希子 熊本

いつの間にこんなよはひになつたのか鏡開きのご指名を受く  
掛け声は心の中で コロナ禍の鏡開きの木槌を下す  
菰樽の鏡を割れば酒撥ねて甘き香流る高砂の席  
宴席で話す勇氣が湧かぬ吾アクリル板に囲まれるては  
婚儀から三週間が経過して発熱者なし祈りが通ず

ピンキーリング 前田 亜津子\*神奈川

遠回しに告げたつもりのメールにも朝読み返せば辛辣な棘  
大船のフラワーセンターの森の中金槐和歌集の歌札のあり  
爽やかに薄紅まとい咲きそめぬ更紗ウツギは俯く乙女  
結婚の記念日三十三回目互いに用を頼める伴侶  
立爪のダイヤの指輪薬指に入らねばピンキーリングに

父の入院 高橋 美羽子 神奈川

割引券ポイントカードなど大切に抱へこみをり我のお財布  
草刈機使ふ音して青き香の立つ白昼につつじくれなる  
父入院六人家族で住みしことある家に母がぼつねんとゐる  
雨音を聞きつつ部屋にものを干す裏つ返しの五本指ソックス  
刻々と何かを手離しゆく父にやはらかく茹でたそら豆を出す

不燃ごみ可燃ごみ 前中 映 東京

遠い昔と近い昔の生きものを分けゆく不燃ごみ可燃ごみ

「雨上がり夜空に」のあのイントロでぼくの葬儀は始めてほしい  
三万円と青い手紙が入つて三万円は財布に移す

あんなにも淡いひかりを先立てて自転車がゆく夕暮れの橋  
梅の湯のタイルに脚を投げ出してひかがみを思ひ切り洗ひたい

琴 線 小 谷 優 香\*鳥 取

名も知らぬ瓶に挿したる白い花厨の窓辺に野の香を放つ

父は右娘は左子は右に良き遣伝子のえくぼくつきり

いつの日かローマに行こうお守りにパスポートまた十年更新  
おつきさまはふたつあるのと昼の月にはじめて気づく四歳が問う  
霧雨に初音聴こえて昼さがりまっすぐに張る私の琴線

図書館にて 吉田真弓 北海道

春風に揺るる木見ゆる図書館の大き窓辺に本を読むひと

密さけて本を借りるもわづらはし行きたき書棚に人は動かず  
探したき書棚の前に人のゐて時を潰して棚に戻れり

結末の明るき本を選びたり伊坂幸太郎三冊借りぬ  
球場の建設現場クレーン車はブーム伸ばせり空突くごとく

夏の香つれて 内藤丈子 福井

鳩のうみ見放くる朝に真白なる水鳥たちは風と飛び立つ

はらはらと余呉の湖畔に散る花は小舟にのりて春を行くらむ  
熊避けの鈴音ひびく日野山の湧水に沿ひ水芭蕉咲く

桜色のホタルイカ漁はじまりて越前漁港は春の発光  
菖蒲湯に温もる夕べ窓辺には夏の香つれて薄青の月

リモート 樋口 八重美\*広島

リモートの画像で互いの健康を確かめながらひととせ過ぎぬ  
新緑の風のおいを思い切り吸わせてやりたしマスクの児らに  
新緑の三次盆地の朝をゆくマスクの児らの静かな行列  
マスクした一年生が大声ではしゃいで笑って下校してゆく  
はらわたのごとく空き家の戸口から家具の出されて捨てられており

ウエルカムフクロウ 三枝 佳子\*静岡

美術館へ登る坂道はやばやと夏椿咲く憲法記念日

真夜中に雨降りやみてフクロウの声聞こえて静寂深し  
まだここに自然が残っているあかしウエルカムフクロウ五月吉日  
山桜カタクリリンドウ咲く道を歩けばかなたに残雪の富士  
（かわいらしい小さな花が咲きます）と書かれた札あり花の名はなく

豆 御飯 樋田 由美\*三重

あゆみゆく日の階段は不確かで臆にかすみ花鮎芳笑む

紫の花のすべてを落とすおえ 今木蓮は青々と立つ  
大空に溜まってしまった悲しみは電となって晩春を打つ

そうだけど・思うけれどもわかるけど 繰り返す日々花みずき揺る  
豆御飯今日こそせむと莢取れば豆はわらわらポウルに集う

片手間 水辺 あお静岡

朝なさな見分けつかねどきつとあるおととすずめ、ねえさんすずめ

金の眼と黒の冠羽でひきつけてキンクロハジロは媚を売らない  
落ち梅の上に梅落つゆるやかに陽射し強まる音なき午後  
片手間に猫をなでるな片手間に夫をなでるな老いそめし手で  
いくつかは何の祝ひかわからぬがわからぬままに七連休過ぐ

春のシリウス

永松 たづ子\*大分

もどれない、ETCのバー開く、利那の後悔おさめて加速す  
おきぬげに胸にそよ風わたり来ぬわが鬱遠のき終わりし証  
ゆるやかな双極性障害というわれは秘かに軽躁を好む

椽かたきおなもみの種子そが産めり笹の葉形の清しき双葉  
さらしたるビールを買いに歩くこと西空に春のシリウス見て決む

紙こひのぼり

中村 京 兵庫

ブルタブの軽き音たて耐ハイを開ける二人は下戸なる親子  
花まつり天上天下を指す釈迦にしづしづそそぐ甘露の甘茶  
えらさうにおーいと屋根で啼く鴉われはおまへの妻にはあらず  
クレヨンの青色で描く大小のいびつなうこの紙こひのぼり  
尺ほどの矢竹に子らの鯉のぼり五月の園に群がりおよぐ

過去の悪事

永田 恵美 福岡

シグをシグで話す人ゐてふるさとの訛りに会ひぬここ博多駅  
正面の若者のピアス繰り返し数へある診察までの時間を  
既視感ハスマホの弊害言ふテレビ昔は君も非難されたよ

夏陽あたるフロントガラスが眩しくて過去の悪事を白状しさうだ  
ああ、ちくしやう！大声で叫ぶ若者の声響きをり福大病院  
瘡を得て教へらること多くあり。一はおそれず生きていくこと

南部 赤松

中居 久子\*岩手

誰がために育林せしや亡き夫よ伐採迷い遺影を見上ぐ  
悠遠たる南部赤松陽に映えておらが山さと夫の声する  
境界の杭を確かめ歩く山おぼろな記憶に推し測りつつ  
持ち山の野辺を彩る山吹に「役に立てろ」と夫の声聴く  
ちぎれ雲空の青さに吸われゆく迷い溶けゆく卯月の朝

悪魔のささやき

塚本 裕紀子 東京

「孟母三遷」そんな言葉があるを知る万智さんの子はもう高校生  
アイシングたつぷり乗せたシナモンロール駅前パン屋の悪魔のささやき  
新しきスマホのマニュアル読み進む墓石のやうな脳をほぐして  
人がみなマスクしてゐて静かなりクッコ、クッコと鴉なく昼  
水色が五月の空に紛れつつワンピースゆく駅前通り

わが身の不思議

北野 カズミ 福岡

晴れ渡る空の香を吸ふ山の緑と庭の植木とよろこびあひて  
ひとしきりねむりてさめてあやごとくも難なくこなすわが身の不思議  
ありし日の父母の声ふとおもふコロナの日々の梅雨入りの雨  
運動とぬり絵と食事入浴もデイサービスは楽しみの日々  
むつかしい茅蜩の文字覚えたりその鳴き声をスマホで確かむ

また舞ひ上がる

牧野 初江 鹿児島

甘蔗畑の中の細路歩み来て丁度二〇〇歩うすら汗かく  
白百合の花季過ぎて断崖に群るる残骸見上げて惜しむ  
タンポポの綿毛の種が風に乗りわが前を過ぎまた舞ひ上がる

校門を一気に出でし男の児らの集団消えて元の静けさ

三叉路を右へ左へ別れゆく男の児ら両手を振り合ひながら

メンデルの法則 栢 弘子 山口

風にのり西より来たる黄砂にてひと日おぼろな風景となる

もうすでに油つ気なき白髪に針を当てつつ縫物をする

メンデルの法則ふとも思ひをり春陽に照れるエンドウもぎつつ

母の忌に訪ひたる寺に石南花は雨粒のせてたわわに咲けり

道の端によもぎ萌えゐる切傷にその汁塗りしもはるかとなりて

牛の背の電話番号 桜井 みさを\*長野

母の日の贈り物見てなつかしく夫もいたらとふと想いたり



「その二集」特選

部活指導 清水 佑太郎\*東京

部活指導でトラック走る生徒たちの最後尾を行く昔の私

先生も飲みませんかと差し出された緑のコップにポカリスエット

投げられし円盤取りに走るとき口開けている飼犬みたい

アマゾンで砲丸投げの鉄球がオススメ商品にズラリと並ぶ

寝る前に今日は自分を生きたかと豆球が訊く僕は首振る

神などはいまだ見ざるに太陽の大きくなりて沈む輝き

信濃路は群山かけり日の余光裾野にありて山草あおし

てんまん宮の参道近き植込みに青き梅の実丸々と生る

草深き阿蘇の牧原立つ牛の背に印さるる電話番号

空中ダイブ 高山 幸子\*三重

しぶき上げ水奔りたり草を刈り朽葉のぞきし水路を田へと

空映す水田に入るはスリリング空中ダイブの心地となりぬ

五月ばれ空を映せる水張田のそらへ踏み入り早苗を植えん

一年にたった一日の稼働なり納屋からゆるり田植え機出でる

「本日はルビー婚です」声張れば田植え機に乗る夫が手を上ぐ

早苗田をS字の首を揺らしつつそりり足抜く青鷺一羽

ケバブのゆくへ 谷川 恵崎玉

学生の姿まばらなキャンパスに射す陽ますます烈しく痛し

キッチンカーの姿見えずに思案するケバブサンドのケバブのゆくへ

中庭にグループありて「黙食」の看板のひとすすすと寄る

ガゴガゴと台車を押してゆく先に紋白蝶は眩しくひかる

色の濃くなりしアスパラガスを食むわが身体にもはつなつの浸む

今　　の　　世　　　　　尾　花　照　子\*福岡

子燕が人であるなら鍵っ子と思うきよま基山の春の夕ぐれ  
福岡行き急行にバンクロッカーが頬張っているわかめおにぎり  
クレマチスから回り深き夜のPCR検査ロボット

それぞれが双眼鏡を逆にして先をみるかのような今の世

知事選のポスター掲示場の裏にスプレー描きのお碗のひとつ

エ　ゴ　の　　花　　　　　斎　藤　洋　子　群　馬

唐突に胸苦しさに襲はれて真夜目覚めたり心折れたる

パートタイム辞めると決めた瞬間に心が軽くなつたわたくし

エゴの花満開となり香り立つ夫と選びて十年経ちて

淡き陽にエゴの白花天使めきアンの世界にわれをいざなふ

ばさばさの松の手入れに手こずりて花粉まみれのわれくまんばち

さつくりとジャーマンアイリス株分けし病みがちの母に持ちてゆくなり

小　田　和　正　　　　　海　野　牧　子\*香　川

テレビシヨップで気に入った服注文す堪え性なきこの頃のわれ

ムクドリが仲間合図を送る声なんらわからず耳かたむける

年齢を感じさせない高音の小田和正の生ごえを聞く

コンサートのついでに金毘羅まいりする小田和正は七十一歳

「この道を」の曲に合わせて歌おうにも音源とれず口はばくばく

歩いたり走ったりするのが歌手である小田和正のファンサービスよ

夏はすぐそこ　　　　　三　村　幸　子　兵　庫

葉ざぐらの木洩れ日揺れるこの道はどこへもゆけてどこへもゆかず

悲しみを抱いて眠れば東より明るい空がまた生まれくる

パレットに偶然できた青色で空を描けば夏はすぐそこ

遊星に生きる自由は不自由で動物園のカバを見てゐる

恋歌に心惹かれてそつと貼る付箋は淡い花柄模様

春のファンファーレ　　　　　佐　藤　彩　湖\*新潟

街中に春のファンファーレ吹き鳴らしラツパスイセン花盛りなり

ハリケーンランプのように強かに誰か私を照らしてくれぬか

八重桜は母の悲しみ　兵隊さん行つてしまった日の母の花

「象使い」の免許を取るとバンコクの娘から来る深夜の「ZEN

魚にも人の気持ちは通じると初老のダイバー若く語りぬ

肩　叩　き　券　　　　　高　木　裕　子\*神奈川

卒寿なる母はセーターまだ編めり得意のゴム編みゆるみがちなれど

セーターの糸ほどくこと振り返る老いたる母は亡き父のことを

母の日の花束に添え送りたい期限を記さぬ肩叩き券

「おいでませ」誰かが誰かを待つような山口弁よし君に会いたし

コロナ禍の収束はもう待てないわワクチン打って帰る山口に

山　藤　の　咲　く　　　　　小　森　鈴　子　岐　阜

「コスモス」に初めて載りし吾の歌をうなづきながら聞きくれし嫁

初めての部活にシユート決めたる雨にぬれきし孫が語れり

黒々と塗り固めたる畔ありて段々畑に水の入りくる

杉の木を包むがごとく蔓のばしうす紫に山藤の咲く

「このままスツとゆけたら幸せ」吸ふ息の苦しき義母が吾に話せり

百四十一パーセント 土山 純 子\*兵庫 庫

死ぬまでに歌集一冊出せるかな一日一首に心を込めて  
右左右右と首を振り安全確かめ渡る四つ角

ガツガターと百四十一パーセントの拡大で出てくる原稿はつきり見える  
ワクチンのクープン手にし思いおり蜘蛛の糸つかむカンダタの姿  
親指を立ててほほ笑むシェフ作る出汗巻卵を私も作る

伊万里湾 石本 洋子 佐賀

めづらしく夫が優しく声を掛く今朝茶柱の立ちたる所為か  
ネモフィラのマリンプルーの小さき花気に入りに買ふ苗ケースごと  
一斉に左右にそよぐ麦の穂は励ますことしあと一〇〇〇歩ぞと  
手の十指第一関節曲がりそり気づかれぬやううしろ手にする  
エーゲ海と見紛ふほどに深青の伊万里湾見ゆ鉄路の旅で

そつと 奥村 幹 男\*愛知

街路樹は季節外れの雪のようヒトツバタゴのぬれている白  
サツマイモの畝真つ直ぐに立て終えて隣の畑とそつと比べる



メールにて野菜作りを語り合う五十年前の合奏仲間  
茶房にて不意に鳴り出すモーツァルト レシートを手にしばし聴き入る  
年月が眠り続けて百余年昏き土蔵の空気冷えさる

満点 丸山 克介 鹿児島

子育てのために南を目指し行くザトウクジラは潮を吹きつつ  
せり上がるクジラの尾びれたちまちに波頭を叩き海底へ消ゆ  
〔認知機能検査〕結果は満点はハンドルに言ふ「安心せよ」と  
「ひよどりに失礼よね」妻言へり「卑しい鳥と誰がつけたの?」  
小市民われの喜びスーパーに半額割引の寿司二個を買ふ

賛否背にして 渡辺 幸子\*福島

リビングにテントを張りて活気づく子らは遊びの天才となる  
ベランダに家族集めてバーベキュー自粛の憂さをしばし忘れる  
少しだけ歩幅広めて花の道フレイル予防の貯筋している  
復興のまだ半ばなる福島路聖火かけ行く賛否背にして  
フレイルの予防と自ら励まして山菜摘みに距離延しゆく

老いぐめる 戸田 セツコ\*広島

街に住み六十年なれど日の暮れは山家をつつむ夕映え恋し  
まさぐれど郵便受けは空っぽでポンと閉じれば日暮れの風が  
禁煙を子はすると言う老いぐめるわれを励ます「プレゼントです」  
「父さんの命日じゃね」と水木咲く下ではほえみ娘が言えり  
十年目の夫の命日息子より「入院ベッドの上で拝みました」と